

アフリカの人々と名付け 42

名前と番号—牧畜民の人間観

小馬 徹

生まれ順名と序数詞

先には江戸期の八丈島、西アフリカのフルベ、アカン、東アフリカのキプシギスを比較して、生まれ順名のもつ意味を検討した。

今回論じるのは、生まれ順名が序数詞に由来するかどうかに関する意味である。アカンでは、十男（十女も？）にまで決まった生まれ順名があり、しかもそれらの名は序数詞に由来する。例えば、「十番目の子につけられる『バドゥ』』という名は、『子』を意味する『バ』と、一〇を意味する『ドゥ』というチュイ語の結合がそのまま名前になったもの』だという〔高根務「ガーナーアカンの人々の命名法」松本脩作・大岩川敏（編）『第三世界の姓名』、1994〕。すると、八丈島の命名法によく似ていよう。

ところが、フルベの生まれ順名は序数詞には由来しない。また、キプシギスでは生まれ順名は長子と末子の異称としてあるだけだが、序数詞とは無縁だ。この見逃しがちな違いは、重要な意味を持つ。フルベとアカンよりもフルベとキプシギスの方が似ているとも言えるのだ。

名前か番号か

ある対象を番号で呼ぶか名前か呼ぶか、つまり同類中の一つとして意識するか、それとも個別性を尊重するかは、決して同じ事ではない。参考に、分かり易い比較を試みよう。

三重県の鳥羽水族館では、雄一頭と雌三頭のスナメリが最近「サッカー」遊びを覚えて人気を博している。「愛称はなく、ここにやって来た順番が呼び名になっている」。「遊び方にも個性や特徴がある。七十七番は予備のボールを独り占めしてしまう。六十四番は遊びはするがボールの扱いが下手、飼育二十四年目で古参の

雄の三十六番はドリブル以外はあまり得意ではない」〔『朝日新聞』1997年7月10日〕。

一方はほぼ同じ頃、千葉県鴨川シーワールドでは、「全長四メートルのシロイルカ、デュークが、直径五センチ、長さ十四センチの円筒のカプセルを引っ張って泳ぎ回った」。これは、腕時計の「自動巻き」方式を応用した発電機を鯨に取り付けて科学調査を行うための予備実験であった〔同紙、1997年7月17日〕。

報道の内容は鳥羽の方がより身近だが、全体的には、番号でスナメリを呼ぶ鳥羽よりも個体名でイルカを呼ぶ鴨川の記事の方がずっと親しみが持てる。因みに、同紙〔同年7月29日〕は、横浜の八景島シーパラダイスでシロイルカの芸が始まり、愛称を募集していることも報じた。

名前か呼ぶか番号か呼ぶかは、動物が対象の場合でさえ、一面では全く別のことだと言える。

名前と「背番号」

最も非人間的な扱いは、名前を完全に奪う事である。小川は、モンテニユを引用して、西アフリカのカソンケ社会では「奴隷を人間とは異なるモノのように見なす手段として名前そのものが与えられなかった」と言う〔小川了「文明のなかの人の名づけ」、梅棹忠夫・小川了（編）『ことばの比較文明学』1990〕。またヨーロッパでは、奴隷は定義上存在しないものだと見て、外国人の名前を付けた〔前掲書〕。

人間をモノのように見なす別のやり方が、番号で呼ぶ事である——二号の一語を思えば十分だ。探偵映画で一世を風靡した片岡千恵蔵は、最初に入団した劇団の座長片岡氏から、十八番目ゆえに十八郎（トッパチロウ）の名を貰った。ここには、弟子を自分の所有物のごとく見る意

識が潜んでいよう。

曾我兄弟の兄を十郎、弟を五郎と言うのは、各々の名親にとって十番目と五番目の名子だからだが、上の例と類似の意識を読み取れそうだ。ただこの場合、2人の実の親が万事承知のうえで庇護を進んで求めた。それが名親・名子だ。

また、警察の高級官僚となった無二の親友に後日会ったアナートル・フランスは、苦々しげに、「あいつは、数字になっちまいがった」と言い捨てた。当時のフランスの官僚は襟に部局を示す数字を付けていた。彼は、友人の官僚根性を数字で象徴したのだった。

かつて米国のマイケル・H・デングラー氏が1069への改名訴訟を起こした。だが、地裁も州の裁判所も彼の申請を却下したという。この訴訟には、人をモノ同然に扱う現代社会への逆説的な抗議が込められているように思う。

国民背番号制は経済活動全体の掌握、特に地下経済の捕捉には著効がある。だがわが国では、非人間的な制度だと忌避する声が高い。

序数詞への感受性

序数詞に由来する生まれ順名をつける慣行は、決して西アフリカや日本に限らない。古代ローマでも、*Primus, Secundus, Tertius*などの名前が用いられたという〔前掲書〕。いわば、太郎、次郎、三郎である。ただ、古代ローマのこうした名付けの固有の意味付けは分からない。

インドネシアのバリ島では、姓を無視して第一子から第四子まで、出生順にワヤン、ニョマン、マデ（またはヌンガー）、クトットという名前を与える。そして、第五子以下は再び同じサイクルを繰り返す〔前掲書〕。やや趣を異にするが、疑似生まれ順名とも呼べようか。

バリのこの慣行には、個人名が厳格に秘匿される事が背景にある。八丈島でも生まれ順名は元々通り名で、実名は他にあった。生まれ順名は概して積極的ではなく、元は代用的に、あるいは迂回的に使われたと言えるだろう。

その場合でも、アカン、日本、古代ローマな

どでは序数詞に由来する生まれ順名を、キプシギスやバリ島ではそれに由来しない生まれ順名を用いる。一体この違いは何に由来するのか。

牧畜民の個体観

この問題を広く世界的に論じるのは、当面本稿の目指すところではない。ただし、アフリカについては一半の理解を試みたい。

西アフリカのフルベとアカンを比較すると、前者は牧畜民であり後者はそうではない。そして、キプシギスも植民地化以前は今以上に牧畜的だった。アフリカでは、多くの牧畜民が人や家畜を数えるのを強く忌み嫌う事が報告されている。キプシギスでは、子供や家畜を褒めたり、その数の多さに言及する事も、またその数を数えあげる事も不吉だとして忌まれて来た。

西北ケニアに住む東ナイル語系の牧畜民トゥルカナについて、次のような報告がある。彼らは「自分の家畜を視覚で熟知しているので、わざわざ頭数を勘定する必要がない。家畜囲いのなかでも牧地でも家畜の個体を数えあげようと思ひもしないのは、儀礼に集まってくる拡大家族の成員たちを数えたりしようとしなないのと同じなのだ」〔Gulliver, P. H., "Counting with the Fingers by Two African Tribes", *Tanganyika Notes and Records* 51, 1958〕。

トゥルカナを研究した太田至は、牧畜社会で個人の独立性が強く称揚される理由を考察している。太田は、個性性をもった家畜との共住を通して養った対象認識のあり方を人間に投影して、家畜の個性性を個人の独自性の陰喩として重用している、トゥルカナと家畜の相互関係の認識にその理由を見出すのである〔「家畜の『個性性』の認知およびその意味」、和田正平（編）『アフリカ』、1987〕。

隣接する西アフリカのフルベとアカン両民族の生まれ順名のあり方を微妙に分けたのも、同様の事実だっただろう。この意味では、フルベはキプシギスやトゥルカナに近いのである。

（こんま とおる 神奈川大学 社会人類学）